

『英和对訳袖珍辞書』初版の書き込みについて

——主に立教大学所蔵本を中心に

肖 江 楽

1 はじめに

『英和对訳袖珍辞書』(A Pocket Dictionary of the English and Japanese Language)は、堀達之助らによって編纂され、一八六二年に幕府洋書調所から刊行された。英語の学習が急速に普及しつつある時期において、この辞書は発行した直後に売り切れの状態になった。一八六六年に、堀越亀之助が再版改訂の主編を任命され、柳河春三・田中芳男らが協力し得て、若干の訂正を加えて、『改正増補英和对訳袖珍辞書』として開成所で発行された。それ以降、一八六七年と一八六九年にも出版された。

英学が勃発した地域薩摩の学生——前田正毅・高橋良昭らにより、同じ年一八六九年に堀越亀之助の力を得て、見出し語と語義中の漢字にカタカナを振って、『和訳英辞書』(「薩摩辞書」初版)を刊行した。さらに、一八七一年に、五代友厚の改訂増補指示を受けた堀孝之が、アメリカの語学者ウェブスターの英語辞書『ウェブスター大辞典』を典拠として、新たに八〇〇〇余りの語

を追加して『大正増補和訳英林』(「薩摩辞書」再版)を編集した。言うまでもなく、この辞書の誕生及びシリーズの改訂増補が日本の英学辞書史において果たした役割は極めて大きかった。

現存する『英和对訳袖珍辞書』初版は遠藤智夫・堀孝彦の共同調査により、僅か二〇本しか残っていないとされる。立教大学図書館は大久保利謙旧蔵の文庫に一冊所蔵しており、二〇一五年にこの『英和对訳袖珍辞書』をデジタル化にしている。今回は、主に立教大学の所蔵本を中心として、この辞書の周辺について考察することにする。

2 『英和对訳袖珍辞書』の系譜について

書名、発行部数、発行者・編集者、発行社に基づいて、『英和对訳袖珍辞書』の系譜を作成すると、およそ表1のようである。

表 1

版	書 名	部数	発行者編集者	発行社
初版	英和对訳袖珍辞書1862年	200	堀達之助	洋書調所
再版	(第1刷) 1866年 改正増補版 (第2刷) 1867年 (第3刷) 1869年	1000 不明 不明	堀達之助編 堀越亀之助改訂	開成所
第三版	改正増補 和訳英辞書 「薩摩辞書」初版 1869年	1500	堀越亀之助 薩摩学生	美華書房
第四版	大正増補 和訳英辞林 「薩摩辞書」再版 1871年	5000	堀孝之 薩摩学生	美華書房

図
1図
2

3 立教大学所蔵『英和对訳袖珍辞書』初版について

1. 表見返しに、「ISSEIDO／東京神田」のシール（図1）
2. 見返しの遊びの「謙」（丸印）
3. 表紙…横×縦＝191×154 mm 本文…横×縦＝187×149 mm
厚さ…束＝43 mm 本文＝40 mm
4. 状態…書き込みあり（図2）
5. ノンブル誤植…p 26／p 275 p 839／836
6. 最終頁裏の小印…無

以下、これを立教大学所蔵本と呼ぶことにする。

4 立教大学図書館所蔵までの経緯について

遠藤智夫・堀孝彦が現存の『英和对訳袖珍辞書』初版一五本について——調査にもとづく文化史的考察（一九九八年の論文による）——には、次のような記述がある。

本書の存在は、最初、大久保利謙氏の書簡（堀孝彦 あて一九九三年付）により知るところとなる。「小生、『対訳辞書』文久二年初版を持っていると申しあげましたが、（中略）これは戦後間もない頃、神田一誠堂で購ったもので（中略）タイトルページと序文欠を旧所蔵者が写真で補い、ナメシ皮で改装したものです。（中略）。その時既に同書は、立教大学図書館（新座保存書庫）に寄贈されていた。天理図書館へ現地調査に出かけた時、その所蔵本の「畧語之解」ページに、先に見ていたこの立教大本と同一の書き込みのあるのを見つけた。さらに、東大所蔵本の「畧語之解」と同様、その原本は天理本である。

現在、現存二〇本しかない『英和对訳袖珍辞書』初版には、同じ「JASEDO／東京神田」というシールが貼られたものは、ほかには四本があることが発見されている。（惣郷正明氏本、東大国語本、東京女子大本、京都外大本）。また、遠藤・堀の共同調査により、現存する初版本の装丁・サイズはすべて異なっている。そのため、果たして『英和对訳袖珍辞書』初版の原装はどんなも

のだったかという疑問も生まれる。しかし、現存本には再装が多く、「原装」とする記述もなかったことから、特定するのは極めて困難である。以下四つの推測がありうるとして、今後の課題となる問題である（遠藤・堀 一九九九年の本による記述）。

- ① 現存本のどれかが原装である。
- ② 原装は一種でなく、数種類の装丁があった。
- ③ 原装は薄表紙で取れやすく、すべて再装された。
- ④ 初めから表紙はなく、購入者が好みに応じて製本屋に注文して作らせた。

5 立教大学所蔵本の書き込みについて

立教大学所蔵本の書き込みには、天理原本から複写した「畧語之解」のページの書き込みと、辞書中身の内容の書き込みとからなっている。今回の考察は、主に「畧語之解」の書き込みを中心とすることにして、中身内容の書き込みの紹介については随時書き添えながら、論を進めていきたいと思う。

5・1 「畧語之解」ページの書き込みについて

先行研究を踏まえ、遠藤智夫・堀孝彦は、天理大学所蔵本の「畧語之解」の書き込みについて下記のように指摘を示している。

まずは、「Abandoner 見捨ル人／Misouterou ning」と書き込みがある。日本人なら Misuteru hiro と読む筈。「人」を min

(ニン)と読んでいること、そして、訳語の日本語に、更にわざわざローマ字の読みをつけていることから、旧蔵者は外国人と推定される。また、「畧語之解」ページ中段末尾の書き込みを「悪、…… mauvais」とフランス語で入れていること、「u」音を「ou」と表記していることから、旧蔵者はフランス人の可能性が高いとの指摘を荒川清秀（愛知大学）から受けた。さらに、フランス人、メルメ・カシオン編の『仏英和辞典』（Paris 一八六六年）は『英和对訳袖珍辞書』初版を参照したことがその序文で明らかなことだ。カシオンが初版を江戸で購入してフランスに帰国したのは確かだからである。もちろん、「畧語之解」の書き込みの人物はカシオンであろうと思われる。しかし、市立函館図書館に所蔵されているカシオンの自筆書簡の筆跡鑑定では書き込みの持ち主はカシオンではないと判定したことにより、新たにもう一人のフランス人日本語学者バジェスの名前が浮かび上がった。書き込みの主を明かにするために、これからバジェスの日本語活動及び史料への探索は必要であると強調した。

「畧語之解」の書き込みについて、フランス人宣教師によったものに違いないが、一体誰が書き込んだかについては明らかにっていない。今回、筆者はこの問題について興味を持ち、先行研究を踏まえながら、特に幕末期におけるフランス人宣教師の日本語研究資料、ならびにパリ外国宣教師資料室所蔵の史料に基づいて、この書き込みの主について試論を述べてみたいと思う。

6 メルメ・カシオンの『仏英和辞典』に関わる人物について

6・1 カシオンの『仏英和辞典』の紹介

以下は『仏英和辞典』の序文を引用し、後ろにル・ルー・ブレンダン（Le Roux Brendan）による日本語訳（二〇一四）を記す。以下、本論文にあるフランス語との日本語の出自は、Le Roux Brendan が書いた論文「仏人宣教師メルメ・カシオンの『仏英和辞典』について」（二〇一四年）から引用する。

《Dictionnaire Français-Anglais-Japonais (Le japonais en caractères chinois-japonais avec sa transcription en caractères européens)

Composé par M. l'Abbé Mermet de Cachon

Et publié par les soins de M. A. LeGras, Capitaine de Frégate, Officier de la Légion d'Honneur pour lapartie anglaise

Et de M. Léon Pagès pour la partie japonaise

Sous les auspices de Leurs Excellences

Monsieur Drouyn de Lhuys-Sénateur, Ministre des Affaires Étrangères-

Et Monsieur le Marquis de Chasseloup-Laubat-Sénateur, Ministre de la Marine et des Colonies-

Première livraison (La seconde et dernière livraison doit paraître dans le courant de l'année 1867)》

日本語訳：

「仏英和辞典（日本語はヨーロッパ文字〔ローマ字〕の書き替
えと、中国―日本文字〔漢字〕で」

メルメ・ド・カシオン神父により作成

英語の部分は A・ル・グラ氏（海軍中佐、レジオンドヌー

ル勲章オフィシエ章（四 等）により、

日本語の部分はレオン・パジェス氏により出版（編纂）

ドルアン・ド・ルイス氏（上院議員、外務大臣）と

シヤスルー・ローバ侯爵（上院議員、海軍と植民地大臣）

両閣下の御庇護の許、第一回配本（第二、つまり最後の配本
は 一八六年中に出版される予定）」

6・2 カシオン辞書編纂の協力者の推定―宣教師ムニク

ムニクは一八二五年に南フランスのピレネ山脈に生まれた。一
八四五年、パリ外国宣教会の神学校に入学し、一八四八年三月に
司祭に叙階された。同年五月に、「鎖国」が始まって以来日本に
滞在した最初のフランス人の宣教師で、後に第一次日本使徒座代
理区長となったフォルカードとともに、香港に向ってロンドンか
ら出発した。一八五六年四月にもう一人の宣教師レイ・フュレと
共にフランスの軍艦「コンスタンティヌ号」に乗り、五月二〇
日から二五日にかけてフランス人の宣教師として初めて箱館に滞
在した。その後、一八五六年一〇月二六日以降フュレと共に琉球

王国の那覇に滞在したが、この二人の新しい宣教師が到着した時、
那覇には一八五五年二月二六日から既に二人の宣教師のジラール
とメルメが滞在していた。

ここで宣教師ムニクを紹介しておく必要があるのは、パリ外国
宣教師資料室に所蔵されている、カシオンとともに琉球に赴き、
長く滞在したフュレの書簡（一八五九年六月三〇日）に、次のよ
うな内容があったからである。

Nous craignons donc que ce fût un ouvrage prématuré et qui
ne fit crier contre les missionnaires les gens du monde savant
qui savent qu'on ne peut pas humainement apprendre une
langue en deux ans [...] de manière à faire un dictionnaire
soigné.

[...] je pensais qu'il serait utile que le cher Mr Mounicou
concourent à la confection de ce dictionnaire à cause de sa
capacité infiniment supérieure à celle de Mr Mernnet dans la
connaissance de la langue chinoise ... [...] J'ajoutais aussi
cette idée : ce dictionnaire fait ainsi de concert serait soigné,
et dut-on [sic] attendre 2 ou trois ans, on n'y perdrait pas.
Car alors on pourrait obtenir l'autorisation de le faire
imprimer à l'imprimerie impériale, et alors il y aurait
avantage pour les Missionnaires et la Religion. [...]

日本語訳：

この著作は早すぎ、しかも辞書を丁寧に作成するのに二年
で言語を学ぶのは人間的に無理だということを知っている学

界の者達が宣教師達を批判させるようなものになるのではないかと我々は恐れていました。

〔中略〕この辞書の作成にムニク氏が協力した方が良いということも考えていました。というのは、彼の中国語に関する知識はメルメ氏のよりはるかに優れたものであるからです。

〔略〕このような提案もしました。つまり、そのように「ムニク氏が」協力して作成されたその辞書は丁寧にできたものになり二三年待ったとしても、損はしないだろうということです。なぜかと言うと、その場合は帝国印刷所で出版されることを許されるだろうから、宣教師にとってもキリスト教にとっても有利になるからです：〔後略〕

これによると、フュレは中国語ができるムニクに協力を求め、二人で辞書編纂に取り組んだ方が良いのではないかと提案していることが窺える。しかし、この時点では、フュレ書簡に提起された「著作」が「仏和辞典」であるか、または「和仏辞典」であるかは不明である。なぜかといえば、カシオンは仏和辞典の編書も、和仏辞書の編纂と平行して続いていたからである（ル・ルー プレンダンの研究による）。とにかく、カシオンの辞書は常に完成しつつあると見られる。カシオン自身からルセイユ神父への報告書簡（一八六〇年三月六日）に「《Depuis le matin jusqu'au soir je suis avec mes livres. Mon dictionnaire anglais-francais [sic]-japonais [sic] est a [sic] peu près achevé (2volumes)》とあり、「朝から晩まで本とともに過している」二巻からなる英仏和辞典はほぼ完成している」と報告している。はたしてムニクが

カシオンの辞書編纂に参加したか、さらに「畧語之解」の書き込み者であったかについては、カシオンの書簡によって、これに関わる情報が一切見当たらない。したがって、この問題と関わるキーマンではないと考えられる。

6・3 フランスにおける日本学の創始者ロニー

レオン・ド・ロニーは一八三七年四月五日に、有名な学者家庭で生まれ、もともと植物学者を志したが、中国語の研究に没頭し、途中で自らの力で日本語の研究を開始した。一八五四年に、日本に関する最初の著作である「日本語研究に必要な主要な知識の概要」を発表した。一八六二年に文久遣欧使節がフランスを訪問した際に、もともと遣欧使節通訳担当はバジエスであったが、通訳の役割を果たしていなかったために、ロニーに代わったと言われる。このようなことがあったためか、一八六三年、パリの国立東洋語学校日本語講座開講の教授に、三十一歳のロニーが二〇歳も年上のレオン・バジエスを退け、その初代教授となった。

ロニーは文久遣欧使節の通訳を務めただけでなく、日本語がより一層上達できるように一行がフランスを出国した後も同行した。後にフランス公使レオン・ロッシユの通訳として幕府とフランスとの外交交渉において栗本鋤雲を助けた宣教師カシオンと知り合いになった。一八六七年、外国奉行として活躍し、フランス滞在中にロニーと交渉を持った栗本は、この若いロニーの人物、語学力などをよく観察している。「ロニー、歳二〇余、一個の奇書生なり。家至て貧なれども、産を不治、母に事て頗る孝なり。

唯性議論を好み、善く人を誅毀す、故に人甚だ是を尊ばず。」というよくない評判を記すとともに、「然れども善く我が国の史書を読み、能く我国の事績を記す。日本史、日本記、日本外史の類、劉覽残すなく、傍ら雑書におよべり。」「ロニーは鉛筆を以て、我の字を書す。字格端正にして、かつ頗る速なり。自ら姓名を訳し、羅尼と書す。」というように高く評価もしている。ロニーの筆跡が「畧語之解」の書き込みと一致するかどうかについて見てみると、幸いなことに、福沢諭吉がパリで買った手帖に、はっきりと



図 3

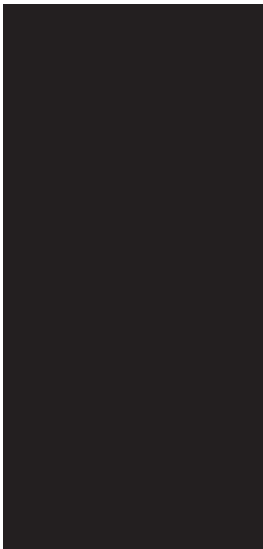


図 4



図 5



図 6

ロニーの筆跡を残したものが、国会図書館に保存されている。以下は、国会図書館所蔵の資料——福澤諭吉協会刊行『西航手帳』の複製と、富田正文・長尾政憲の解説・解説を掲載しながら、「畧語之解」の書き込みの筆跡と照合することにする。写真の下に解説を添付しておく。

図3——「解説」『西航記』三月十九日条、「支那語を学びよく日本語を言ふ。時に旅館に來たり談話時を移す」に対応。名刺代わりに手帳に記入させたもの。民族学会、アジア学会評議員の肩書と学会の住所などロニーの字筆。「羅尼ノ名當」の五字だけ福澤の筆蹟。

図4——「解説」四書、大學、中庸、論語、孟子、第一年吾ハシナ東語ヲマナヒマシタ。ワルシ、タダイトケナシ、史記、老子、千字文、三字經、康熙字典、禮記スコシク、詩——「經」オオクモットモコノム、書經オオク、好述傳、王嬌李、伏国記、292始めて學ぶ、古文評注「注」上は多分ロニーの筆蹟であろう。中の「始て學ぶ」との四字と羅尼十年前……一行だけ福澤の筆蹟。」ロニー十年前より和漢學を始め所説の如し。

図5——立教大学所蔵本（天理大学所蔵原本）

図6——国会図書館所蔵宣教師ムニクの書簡

今回の照合に殊に注意を払うべきことは、漢字の字画である。

幸い『西航手帳』に記載されている「學」、「禮」、「書」、「經」は、「畧語之解」の頁にも存在していることで、照合することが可能である。筆者は、両者の間には大きな差異が存在していると考え。たとえば、『西航手帳』にある「學」の下の「子」、「老子」の「子」、「李」の下「子」の書き方はよく似ているが、「畧語之解」にある「學」の下の「子」とはかなり異なっている。また、「禮」の左側の「示」偏、「經」の左側の「糸」偏なども、「畧語之解」にある漢字とは一致していないと判断される。しがたつて、ロニーはこの天理大学所蔵原本の書き込みの主ではないと考えられる。前述した遠藤・堀の先行研究と、筆者自らの考察を加えた結果によつて、少なくともフランス人宣教師ムニク、ロニー、カシヨンの三人は「畧語之解」の書き込みはしていないということになる。では、一体誰がこの書き込みをしたのか、果たして当時日本語に堪能なフランス人学者がはかにいるだろうかと思える。と、やはり辞書の序文に提起された日本語の部分を担当するレオン・パジェスではないかと推測される。

6・4 レオン・パジェスの可能性への言及

以下、パジェス・『仏英和辞典』・カシヨンとの関係を分析し、書き込み者の確定を行いたい。ここでは改めて原点に立ち戻つて、一八六六年の『仏英和辞典』原文表紙の内容を引用することにする。

Avis préliminaire

Le Dictionnaire Francais-Anglais-Japonais, dont nous publions aujourd'hui la première livraison (la seconde paraîtra dans le courant de 1867), est l'œuvre de M. l'abbé mermet de Cachon, résidant au Japon depuis environ douze ans.

M. l'abbé Mermet nous a prié de surveiller l'impression de son livre. En même temps M. le commandant A. Le Gras, du Dépôt des cartes et plans de la marine, et auteur de nombreux travaux hydrographiques et en particulier de directions nautiques pour les régions maritimes de l'extrême Asie, a bien voulu nous seconder dans notre travail en revisant la partie anglaise.

Aux précédents ouvrages lexicographiques de MM. Medhurst, Siebold [sic] et Hoffman, Gochkevitch, et du japonais Hori Tatsnokay (1), vient s'ajouter une œuvre française, et nous espérons nous-même, dans le cours de la présente année, avoir fait paraître, également en français, les deux dernières livraisons du Dictionnaire japonais-français, traduit de l'original portugais, œuvre des Pères de la Compagnie de Jésus.

LÉON PAGÉS [sic]

(1) A pocket dictionary of the English and Japanese language. Yedo, 1862

日本語訳：

今日最初の配本（第二回配本は壹八六七年中に出版される予定）を発行する仏英和辞典は、約一二年間日本に滞在しているメルメ・ド・カシオン神父の著作である。

メルメ神父は著書の出版を監督するように私に頼んだ。それと同時に、海軍海図地図保存館所屬で、多数の水路測量、特に極東の海水域図に関する航海の著書を著したA・ル・グラは英語の部分を校正することで私を補佐することに賛成してくれた。

メッドハースト、シーボルトと Hoffman、グスケヴィッチ、日本人のホリ・タツノケの以前の諸辞書にフランスの著作が加わり、私自身は今年中、イエズス会の神父達によるポルトガル語の原文から訳した和仏辞典の最後の二つの配本をフランス語で刊行することを望んでいる。

レオン・パジェス

A pocket dictionary of the English and Japanese language. Yedo, 1862

右のように、パジェスが辞書の協力者であることが記されている。日本に行ったことが一度もないパジェスは、一八一四年に生まれ、一八四七年から一八五〇年まで中国で外交官を務めた後、五〇年代半ばから日本学の道を歩み始めた。パジェスの日本研究は中国学から入り、日本での最初の布教に尽くした聖フランシスコ・ザビエルに関わる『聖ザベリオ書簡集』全二巻（一八五五年）を編纂した。また、フランス人の視点による『日本関係図書目録』（一八五九年）を刊行し、さらに在日オランダ商館長 J・D・ク

ルティウスの『日本文典』をオランダ人J・ホフマン増訂による
 文典類を参考にして『日本文法試論』（一八六一年）、『日本廿六
 聖人殉教記』（一八六二年）、一六〇三年長崎版の『日葡辞書』の
 フランス語訳『日仏辞書』（一八六八年）に心血を注いで著作し
 た。ここでは、土井忠生による『日仏辞書』についての解題を、
 以下に簡単に紹介する。

この辞書は最初に四分冊として、下記のように刊行され一八
 六八年にはこれら分冊本に改訂を加えて改めて訂正合本が刊
 版した。

第一分冊	(pp. 1â 200)	一八六二年
第二分冊	(pp. 201â 400)	一八六五年
第三分冊	(pp. 401â 600)	一八六六年
第四分冊	(pp. 601â 933)	一八六八年

右の年代からみれば、パジェスの『日仏辞書』の第二・三冊分
 の編纂は、カシオンとの『仏英和辞典』と重なっていることが明
 らかである。つまり、パジェスは、彼自身の『日仏辞書』を編纂
 しながら、カシオンに頼まれた『仏英和辞典』の校正作業も担当
 していたと見られる。したがって、パジェスの『日仏辞書』、カ
 シオン編の『仏英和辞典』、『畧語之解』の書き込み漢字、この三
 者のローマ字表記法の比較を行い、ローマ字表記の付け方の異同
 について考察を加えることにする。以下、筆者は遠藤智夫（『英
 和対訳袖珍辞書』とカシオンの『仏英和辞典』）による「略語之
 解」ページの書きこみの試読を踏まえて、一部分を削除したり、

一部分を変更したりして、以下の表2を作成した。

表2

略語之解		
目録 (mocourocou)	處 (tocoro) = 所	又 (mata)
鋏 = (ken) 釵	從 = 從 (chitagō)	上 (chenjō)
盡 = (ts'cousou) 尽	令 (rei)	留 = (Todomarou) 留
殘 (nocorou) = 殘	發 = 發 (Tōbassou)	覺 = 覺 (omoyeurou)
禮 = 礼 (sō)	學 (gacou) = 学	samasou)
事 = 事 (coto)	返 = 込 (cayesou)	應 (wō) = 応
顯 = 顯 (arawasou)	疊 = 疊 (tatamou)	援 = 授 (saggoukerou)
禮 = 礼 (rei)	惡 = 惡 (nicoumou)	雅 = (ga) / (tadachi)
澤 = 沢 (tacou)	應 = 応 (atarou)	寫 = 写 (cacou)
歸 = 帰 (cayeri)	經 = 経 (kei)	實 = 実 (micoto)
像 = 像 (zō)	盡 = 尽 (Tsoucousou)	命 = 命 (mei)
勞 = 劳 (rō)	慕 = 忝 (bo・negō)	鑄 = 鑄 (sabi)
惡 = 惡 (acgo) (achii)	嶮 = 險 (kewachiki)	續 = 続 (tsouzzoucou)
鹽 = 塩 (chiwo)	滿 = 満 (Ban-mitsourou)	瘤 = 瘤 (cobou)
譯 = 訳 (cotobatsoutayerou)	勞 = (rō) 劳	據 = 拠 (chōkio)

表 3

漢字	略語之解	バジエス 日仏辞典	カシオン 仏英和辞典
令	rei	rei	rei i
畳	tatamou	tatamou	tatamou
譯	cotobat souta ye rou	cotobat souta ye rou	cotoba ttchta ye/ie rou
返	ca ye sou	ca ye sou	ca ye/ie sou
鋪	sabi	sabi	sabi
嶮	kewa chi ki	keoua/wa chi/si ki	keva/wa si ki
鹽	chi voo	chi wo	si wo
處	tocoro	tocoro	tocoro
學	gacou	gacou	gacou
殘	nocorou	nocorou	nocorou
盡	ts cousou	ts oucousou	ttch cousou
據	chō kiō	chō kiō	chō kiō/kiō
瘤	cobou	cobou	cobou
命	mei	mei	me i
從	chitagō	chitagō	chitagō
實	micoto	micoto	micoto
續	tsou zzou cou	tsou zzou cou	sou dzou cou
澤	tacou	tacou	tacou
慕	bo/negō	bo/negō	bo/negō

以上の試読によると、主に漢字の異体字・正字との対応関係を解釈するための書き込みではないかと考えられる。当時不統一であつた漢字の字体整理が必要であつたのだろう。

そして、改めて『仏英和辞典』序文に立ち戻ると、下記「仏英和辞典（日本語はヨーロッパ文字（ローマ字）」の書き替へと、中国——日本文字（漢字）で」のような記述があることから見れば、この書き込みの主は『仏英和辞典』と深い関係にあることがわかる。筆者が『仏英和辞典』を調査したところでは、異体字のまま使われている訳語が多く見られる。これは、編纂者カシオンによるものか、それとも協力者バジエスによるものか、今の段階

では確定できない。カシオンが辞書編集をした原稿と、バジエスが校正した原本は、パリ外国宣教会や出版者の資料室のどこかにはまだ保存されている可能性があるかもしれない。今後さらに、幕末における日本語とフランス語との関係に関わる珍重な語学資料の発見が期待されている。

また、表2と両辞書のローマ字表記法に基づいて、表3を作成した。浅学である筆者ゆえ、読み取れない漢字のローマ字表記もある。それについては遺憾ながら今回の調査範囲から除外せざるを得なかった。

上の表3を見ると、「疊 tatamou、鏽 sadi、處 tocoro、學 gacou」などのローマ字表記は三者ともすべて一致する。これに対して、「令 [rei]、嶮 kewa[chi]、鹽 [chi]voo、盡 [ts]ousou、據 ch0[kio]、命 [hei]、續 [sou]zou[co]u」のローマ字表記はバジェスの「日仏辞書」の表記と完全に一致する。立教大学所蔵本（すなわち天理大学所蔵本）の「畧語之解」の書き込み者は、バジェスであることはほぼ疑う余地はなからう。そして、「譯 corobatsouta[ye]rou・Cotobatcha[ye]le[rou]」のような「エ」の表記は、「ye」或は「ie」で表記されていることによっても、幕末時代においては、宣教師たちの日本語ローマ字表記はまだ定着していなかったと言えよう。

7 まとめ

今回は、立教大学所蔵本「畧語之解」の書き込みを出発点として、天理大学所蔵本との関係、さらにフランス人宣教師たちの日本語研究について考察した。「畧語之解」の書き込みの主はバジェスであることを踏まえ、さらに史料を加えて推測するに、次のような仮設が立てられよう。

長年かけて日本語辞書刊行の準備してきた宣教師カシオンは、一八六二年刊の本格的な英和辞書と言われる『英和对訳袖珍辞書』を、訳語の参照とするために江戸で購入した。一時帰国を決めたメルメが一八六三年八月にマルセイユに到着すると、ルセイユ神父に「私の「作成した」複数の辞書を持って行きます」と伝えている資料から見れば、自分の執筆した著作を出版しなかった

が、大切な仕事であったからこそ、完璧を期したかったのであらう。

そこで、辞書の日本語部分の出版の校正はバジェスに協力を求めた。一八六三年一月一〇日に、メルメは「『Jecris[sic] à Mr. Pagès je lui caresse un peu le poil, car il peut être utile pour le dictionnaire. [日本語訳] バジェスが辞書のために役に立つかも知れないので、彼にお追従を言って手紙を書いているところ」という言葉をルセイユ神父に報告している。そして、バジェスは日本語の校正を引き受け、カシオンから渡された『英和对訳袖珍辞書』を参考にして、『仏英和辞典』の出版の校正を行った。遠藤智夫の調査（二〇〇二年）によると、『仏英和辞典』にある訳語は堀達之助の辞書からの影響が顕著に反映されている。しかし、カシオンは、一八六四年九月一九日ルセイユ神父あての書簡に、「『[...] Je reçois les épreuves du dictionnaire. Bon Dieu, pauvre Mr. Pagès il que de fautes ! que de caractères mal copiés ! que de mots mal transcrits malus. [日本語訳] 辞書の校正刷りをもらいました。おや、可哀想なバジェス氏！！なんと間違いが多いのでしょう！なんと写しの悪い文字〔漢字〕が多いのでしょう！なんと間違つて書き写されたり読まれたりした単語が多いのでしょう！』とバジェスについての酷評する言葉を伝えている。せつかくバジェスに協力してもらい、日本語の部分の確認・校正を任せていたのに、まさか自分より多くの間違いを犯すなどとは思わなかったのだろう。

一八六五年に、カシオンは友人栗本鋤雲の要請を受けて来日し、『横浜仏蘭西語学伝習所』でフランス語を教授した。当時徳川慶

喜の名代として、弟の徳川昭武がパリ万国博覧会に参列するためか、『仏英和辞典』の刊行のためか、カシオンは一八六六年に帰国した。『仏英和辞典』（第一巻）のみ刊行した後、バジェスの日本語能力に対して凄く不信感を持ったカシオンは、辞書の編纂修正は一旦中断せざるを得なくなった。帰国したメルメは、自ら編集作業を進めることになり、原稿の整理とともに、未刊行の部分を出版するにあたって奔走するに至った。結局は『仏英和辞典』の一部だけが刊行されて、残りの部分と『和仏英辞典』は世に出されてこなかった。いろいろな理由が予想されるが、経済的にも何かがあったのだろう。それ以降、カシオンが来日した記録はないようである。天理大学所蔵本が日本に戻ってきたこと、それが立教大学所蔵本と出会ったこと、さらに、この両者の間に「略語之解」における書き込みという因縁が結ばれたことについては、旧所蔵者神田一誠堂が大きな役割を果たしたのである。

以上は、カシオン所蔵本の経緯についてであるが、真相は必ずしも定かではない。しかし、この辞書に関わる歴史・事件および人物を調査し、さらに外交・文化交流の方面からも考察を加えることによって、興味深いドラマが展開されていたことを知ることができるように思われる。立教大学所蔵本の中身には数多くの書き込みの痕跡が残されているが、今後の課題としたい。

【参考文献】

- 飯田史也「一八五〇年代フランスにおける日本情報に関する考察——レオン・ド・ロシの『La Civilisation Japonaise』を中心に」(福岡教育大学紀要 一九九六年)
- 遠藤智夫・堀孝彦「現存の『英和对訳袖珍辞書』初版15本について——調査にもとづく文化史的考察」(英学史研究 出版者日本英学史学会 一九九八年)
- 遠藤智夫『英和对訳袖珍辞書』の遍歴…目で見える現存初版15本』(辞游社 一九九九年)
- 遠藤智夫『英和对訳袖珍辞書』とカシオンの『仏英和辞典』(英学史研究 二〇〇二年)
- 沖森卓也等編集『日本辞書辞典』(一九九六年)
- 国際シンポジウム「日仏交流の過去と現在」国立国会図書館・フランス国立図書館の所蔵資料から(国立国会図書館 二〇〇五年)
- 肖江楽「幕末・明治初期の『英和・和英』辞典の増補語について——主に『薩摩辞書』再版にある訳語を中心に」(『立教大学文学論叢』第一六号 二〇一六年)
- 杉本つとむ『辞書・事典の研究Ⅰ』(八坂書房、一九九九年)
- 高橋新吉 等編『和訳英辞書』(American Presbyterian Mission Press 一八六九年)
- 高橋良昭等編『大正増補和訳英辞林』(American Presbyterian Mission Press 一八七一年)
- 寺本敬子：「一八六七～一八七〇年パリ万国博覧会における『日本』(日仏歴史学会会報 日仏歴史学会 二〇一三年)
- 富田仁『メルメ・カシオン 幕末フランス怪僧伝』(有隣堂 一九八〇年)
- 堀達之助等編『英和对訳袖珍辞書』(立教大学所蔵)(天理大学所蔵)

蔵)

松原秀一「レオン・ド・ロニー略伝」(慶應義塾福澤研究センター
近代日本研究 vol.3 一九八六年)

『七つの御悲しみの聖母天主堂創設者バリ外国宣教会宣教師ビエ
ル・ムニクー師と同僚宣教師の書簡…1868年7月—18
71年10月…神戸における日本再宣教』(シヨファイユの幼
きイエズス修道会訳、二〇一三年十一月)

Brendan Le Roux 「フランス人宣教師メルメ・カシヨンの「日本の
ミエラルヒーに関する研究」:《Etude sur la hierarchie
japonaise》の試訳」(言語文化研究 松山大学総合研究所
二〇一二年)

Le Roux Brendan 「幕末期に來日二人の仏人宣教師の日本語ローマ
字表記について」(東京学芸大学「学校教育研究論集紀要
(21):97-111」二〇一〇年)

Le Roux Brendan 「通訳・外交官としての宣教師メルメ・カシヨ
(関西大学国際学術リポジトリ 二〇一一年)

Le Roux Brendan 「仏人宣教師メルメ・カシヨンの『仏英和辞典』
について」(帝京大学外国語外国文化 二〇一四年)

カシヨン『仏英和辞書』(一八六六年)
パジェス『日仏辞典』(一八六八年)

『西航手帳』(文久二年・福沢諭吉〔著〕) 福沢諭吉協会出版 複製
「西航手帳」解説・解説・富田正文・長尾政憲(一九八四年)
しょうこうらく(大学院博士課程後期課程在学生)